【無料配布】文学フリマ書き下ろし

伏線の所在　　視葭よみ

立ち上がり声をかけると、きいちゃんはカフェの扉付近からすぐ気がついてくれた。

「ごめん、遅くなって。声掛けたの、こっちなのに」

まっすぐ席にやってきた彼は、息は整っているけれど汗は引いていない。走って来たのかな……約束の時間から30分は経過していないし、経験上きいちゃんの時間管理能力に猜疑を向けるよりわたしが時間を間違えている可能性に目を向けるべき。無事に到着したなら謝罪は不要だ。だから「それほど待っていませんよ」と告げた。けれど、彼は目敏い。テーブルの端に湯気が上っていないティーカップを見つけて器用に冷笑を浮かべる。「お仕事でした？」話題を逸らすと、「いや、起きられなかっただけ。山登ってきたんだけど、想像以上に疲れてたっぽい」きまり悪そうに視線を逸らす。

高校時代からずっとアクティブな彼の趣味に登山が加わったのはきっと最近のこと。社会人になって交流が広がったのかな。謳歌していて何より。

「アイスコーヒー？」メニュー表を渡して尋ねたら「いや、ホット」と言う。

「体が一番吸収しやすい水分は４度ですよ」

「だったらコーヒーは戦力外だね。体内に水分を保持する目的で摂取するのは不向き」

「ほかを提案してもあなたは結局コーヒーを選ぶでしょう？」

「ん、正解――ありゃっす。っと、〝常夏の雪〟ブレンド、ブラックお願いします」

ランチメニューを広げながら、冷水のグラスをテーブルに置く店員さんに告げた。

常夏なのに雪がある場所――高所なら低圧だから気体の分子運動は穏やか。つまり、気温は低い。それこそ、ずっと雪が融けないくらい。

「すっかり登山好きですね」

「要するにキリマンジャロがメインのブレンドってこと。ここ、紅茶専門だけど、注文受けてから豆を挽いてくれるし、コーヒーのメニュー名もわざわざ洒落てるんだよね」

趣に欠けた指摘をするが、このカフェはお気に入りらしい。すでに心を掴まれている身としては、ここ待ち合わせに指定したことを褒めて遣わして差し上げたい。

「ってことで、環季さん。待たせたお詫びっす」

直後、眼前にスイーツメニューが迫ってきた。

貸し１は断られた。いわく、何を言われるかわからないから怖い。

無理難題、押しつけたことないのに。けれど、お詫びを固辞するのは好ましくない。パンケーキを指さして「はんぶんこ」を提案した。「貸し半分とか、そういうのは」メニュー上から向けられた眼差しを睨み返して「言いません」と遮った。

きいちゃんは口をつぐんでメニュー表を手放す。ふと視線がわたしの手元に向いた。ようやく存在に気づいてくれたらしい。

「そのノート、使ってくれてるんだ？」

「もちろん！」

「本当？　良かった。だったら――」きいちゃんは笑みを浮かべて鞄から茶封筒を取りだすと「――こっちも気に入ってくれると思う」

その茶封筒から姿を現したのは、学生時代から見慣れたサイズのノート。ただし厚さは３倍ほど、表紙には何も書かれていないけれど側面の様子から察するに新品ではないらしい。質問する前に「ひとまず、読んで」促されるまま視線を下ろす。ボールペンで綴られた文字は雑多な印象。知らない文字だった。やがてきいちゃんのコーヒーが到着する。そのとき、パンケーキの追加注文をしてくれた。

すべてのページに目を通し終えて、ノートを閉じる。一呼吸おいて視線を上げると、

「お、読み終わった？　どうだった？」

血まみれのナイフと大金を拾った人物による手記らしきものを読ませて、どうだったと尋ねるの？　内容に気体はしていなかったけれど、意図が読めない。彼のことだから意図は存在しているのだろうけれど……ひとまず「どうするんですか？」と尋ねた。

「事実だったら大変でしょ？」

「大変ですね。それで、これからこの手記をどうするんですか？　きいちゃんの筆跡ではありませんよね？　警察のお世話をご希望ですか？」

「もうお世話になったよ。これが届いたのは３か月前だから」

腕に抱えていた茶封筒から紙面を取りだす――公園で拾いました　持ち主を探してください――文書ファイルでよく見るフォントが平然と並ぶ。テーブルに置かれた茶封筒に印刷されている、きいちゃんの勤務先も同じフォントに見えた。

「何故きいちゃんのもとへ？」

「先輩たちから回ってきた」

うん、無理だ。わたしには、この男の言葉の真偽を見破れない。諦めよう。
「受け取ったのはどなたですか？　切手も消印も無いなら、手渡しですよね？」
「ああ、いや。封筒が二重にされたんだ。外側のが別の部署宛で、公募を装われてた。受け取られたもののイタズラ扱いで捨てられそうになっていたところを先輩が保護してこっちの部署に連れてきた。んで、最終的には俺の手に渡ったって感じ。消印はね……3か月と9日前かな」
フォトアルバムの当該写真を表示させてから、スマホを渡してくれた。確かに、撮影された白封筒には、同様に印刷された公募宛の内容と消印が映っている。
外側の封筒を用意した人物と手記の著者は別人なのかな。外側の封筒はきいちゃんにも用意可能だけれど不要な手間だ。遺憾ながら、わたしが惹かれたら彼の勝ちだもの。同封された依頼内容を含めて、とにかく関係者の意図がわからない。
「こちら、どうするんです？」
「同封されてた手紙のとおり、手記の持ち主を見つける。外側の封筒を用意した人物も特定したいけどね。手記に書かれた内容の真偽を確かめて、フーダニットとかワイダニットを特定すれば良い感じの記事になると思ってる」
「そこまで方針が決まっているなら、わたしの出る幕はありませんよ？」
「大丈夫、もう幕は上がってるよ。読んだ時点で何か考えてるでしょ？」
血まみれのナイフと大金……事件性は十二分ある。
他方、実際の事件について関係者が綴った証拠も、何かの理由で虚構が記された確信もない――きいちゃんからの連絡は3週間前――およそ11週間かけて彼は難関の存在に気がついたのだろう。
「どうしてきぃちゃんは、投げた匙をわたしに拾わせるんですか」
「そこにあるから」
「富士山登頂してから――」
きいちゃんは笑みとともにわたしの手にあるスマホのスクリーンをスクロールした。水平方向に遷移して表示された写真には〝日本最高峰富士山剣ヶ峰〟と刻まれた石柱の隣でピースサインするきいちゃんの防寒姿が映っている。
「合成じゃないよ。山頂にいた他の登山客に撮ってもらったんだ」
「……用意周到が過ぎません？」
満足そうな笑い声をあげる彼に「次からはエベレストにします」宣戦布告した。
「覚悟しとくよ。で、今回は？」
人工の美学と謳われる推理小説の完成度において、伏線の量と質が鍵を握る。
著者の力量次第で伏線は如何様にも化けるけれど、それでも、やはり伏線が効果的に機能するかどうか、最終的には読者次第だ。これが、きいちゃんが弄した絶妙な伏線配置によってたどり着いた結末なら、わたしはもう「富士山」としか言えない。
「潔くて何より」つくづく推理作家向きな彼は満足そうにコーヒーカップを傾けた。
伏線は置かれた場所にて、読者の視線が通り過ぎるまで意地悪くポーカーフェイスでやり過ごし、意識が離れていくごとに笑みを深めて、正体を明かす時分を待ち詫びる。そのときが来れば――
「お待たせいたしました、特製パンケーキです。こちらが取り皿でございます」
――途端に糸を引いて線を張り詰めさせ、自分を魅せる。
店員さんが届けてくれたのは、ふんわりとしたきつね色。ほんのり甘い優しい香り。乗せられたクリームとともに店内の柔らかな間接照明と窓から差しこむ自然光を受けて……どこ角度から見てもおいしそう。もはや芸術。
件のノートが回収される代わりにカトラリーが差し出された。
「はんぶんこじゃなくて良いよ」
「やっぱりどうあがいても、きいちゃんには足りませんよね」
「うん。まあ、このカフェ、好きになったでしょ？」
お店選びすら彼の用意した伏線なら、わたしは素直に気づけば良いだけだ。

お読みいただきありがとうございます。
ホットケーキとパンケーキの相違があまりわかっていない、視葭よみです。
先日、【新生ミステリ研究会】所属1周年を迎えました。相変わらずミステリには無知ですが、のんびり〝魅力的な謎解きの条件〟について考えています。
ミステリのためのサイト【探偵役と謎】では、今年度は、MysteryExhibition1を実施していきます。おもしろいミステリと出会う機会になると嬉しいです。
なんやかんや生きてますので、気が向いたときに生息確認してやってください。